

ボーダーレスの時代のスペイン語

橘川 慶二

私は、特にスペインの現代小説に興味を持って読んでいるが、最近10年ほどのスペイン語の変化には目を見はるものがある。日本語でも「アッシー君」のような世情を反映した流行語、新造語が氾濫しているし、ごく限られた数の単語だけによる、まるで文とはいい難い会話を耳にするのも日常茶飯のことである。若者層の語いの貧困化、日本語の乱れなど、昔からいい古されたことであって、今さら改めて驚くには当たらない。われわれオジ様族にとって得体の知れない人種の言葉も、分かっちゃえば、結構、いい得て妙と感心もするし、第一、貧しいボキャブラリーで彼ら、彼女らはともあれコミュニケーションが可能なのだ。TVのクイズ「年の差なんて」で出題されるヤング問題も、一種のアルゴットなのであろう。

スペイン語の変化、とりわけ書き言葉におけるそれも、社会の変化と無縁ではなさそうである。フェリペ・ゴンサレス率いるPSOEによる長期政権、ECの市場統合、経済発展による国民の生活水準の向上。物価高騰によって93年以降のスペインは不安定要因をいくつも抱えているが、スペインは今がいちばん面白い時ではなかろうか。もちろん東側の崩壊という世界情勢も大きく影響している。何しろ悪名高いテロリスト集団ETAでさえ、外国人部隊に依存しているご時世である。いろいろ矛盾をはらんだ、一見、華やかな現代社会。こうした状況の中での社会通念の変化は、小説の中に色濃く反映される。事実上、検閲がなくなったとはいえ、かつては水面下にあった麻薬、ホモセクシャル、最近ではエイズ問題が小説の題材として、あるいは日常生活の1ファクターとしてひとり歩きをしだしている。それにつれて社会のマイノリティーであった彼らのアルゴットが、小説

の中に頻繁に登場してくる。

こうした傾向の萌芽は、70年代にかけてのセラの一連の小説中にすでにあった。それが現代の小説ではいっそう増幅され、まるで卑語、俗語がすっかり市民権を獲得したかのようである。トマス・ガルシアのLa otra orilla de la droge (1984)では、全篇、麻薬用語で占められ、作者自ら巻末に付した用語解説がなければ、門外漢にはさっぱりわけが分からないといった小説もある。性に関するアルゴットは昔からたくさんあった。しかしれっきとした文学作品にこれほど使われるようになったことは、かつてなかった。

文章語に口語が多用されるようになったのは、語法にも及んでいる。自動詞の他動詞的用法、あるいは卑近なサンプルではsuspenderのように、対語のaprobarに合わせた用法が定着しつつあるような例、de-que-ismoとでもいうべき特定の前置詞の多用などなど。文体についても然りである。ピリオドなしの長文化は、やはりセラのSan Camiloを嚆矢とすると思われるが、現代では自由間接話法はおろか、語りの部分に生の直接話法が、句読点もなく縦横に織りこまれ渾然一体をなしている。推敲を重ねたというより、一見、無造作と思われる文体が、読者をぐいぐいと語りに魅きつけていく。アルフレド・コンデのLos otros días (1991)では、会話文、語り文の入り混じった文に、作者は意図的にコンマを多用し、わざと脈絡を切っている。こうした文章を読むには、会話をベースとしたスペイン語文のリズムを身につける必要がある。現代はボーダーレスの時代といわれる。スペイン語の表現のいろいろな面でそれを実感する昨今である。

今、スペイン語が面白い。